

## 第126号（1987年5月）

「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」

“わたしの神様、わたしの神様、なぜわたしをお見捨てになりましたか！”と訳されるこの、アラム語まじりの短い四つの言葉は、十字架上でイエスが発せられた、歴史的事実としても疑いのない唯一の言葉とされ、それは、イエスご自身諳んじておられた詩篇の言葉がおのずと口をついて出たものであらうとされる。(マタイ二七・46、マルコ一五・34、詩篇二二・一)

これに関連して私は、今から三十余年前、東京丸の内の塚本虎二先生聖書講演会で、「イエスが十字架にかけられたこと、それはとりもなおさず神様から見捨てられたのです」との意味のお話を伺った時の驚きを未だに忘れることは出来ない。聖書を読み始めたばかりの私には、神の最愛の独り子が神に見捨てられるなどとは、到底創造さえも出来なかったからである。

しかし、神に背いた人間の罪の深さと、またそれ以上に深い神の愛は、その独り子を犠牲にし、その十字架上の血によって人の罪を贖うという非常手段をとられた。(ロマ三・25以下、ヘブル二・17、同九・12、15等)ここに神がその独り子を見捨てられたとする意味があると、先生は語り祈られたのであった。

しかも神は、かくて十字架上看見捨てられたイエスを三日後には墓から甦らされ、その復活のイエスを信じる者には永遠の命を賜うという。まことに限りなく深い神の愛である。

イエスの復活の季に当り、その死とよみがえりの意味を改めて思いつつ感謝はつきない。(桜井)

## 第127号（1987年7月）

過ぎざるものと永遠なるものと

「われわれは見えるものではなく、見えないものに目を向けている。見えるものは過ぎ去ってしまうが、見えないものは永遠に存続するからである」IIコリント四18(柳生訳)

かなり前のことであるが、ある事件を起した会社の社員が自ら死を選んだ時、会社は永遠ですと言い遺したことばが忘れられない。

過日、ある先端的大企業の社長の講演記録を読んでいて、経営者の責任は、企業を永遠に存続させることだという発言が目に入った。三年前の講演ではあるが、さきの社員もこの社長も、奇しくも、会社や企業は永遠に続くべきだとの堅い信念に支えられているという点で、この国の精神風土の一面を示している。このような姿勢が、日本の高度成長達成にかなり重要な役割を果たして来たことは認められてよい。しかし、

同時に、国民の多くが、永遠ということに如何に安易な態度で生きているかということをも。

会社や企業、地域社会だけではない、民族も、国家も、決して永遠を保証できるものはないことを、二十世紀はまざまざと見せつけてくれた世紀である。いや、すでに二千年の昔、そのことを見ぬいていた人物—パウロにとって、此の世のあらゆる営みの、やがて移ろい去るに過ぎないものであることは、あの古代社会や、自らの属する民族国家の、はげしい変動の事実からも明らかであった。

だが彼は、ギリシヤの哲人の如くに、万物流転が凡てであるとは考えなかった。確かに、見える世界は動き、移り、いつかは消える。しかし、永遠に変わることなく続くもの、それは、あのイエス・キリストにおいて彼に示され、迫り、彼を圧倒した神の愛の支配、復活の生命の世界であった。(IIコリント五1415)(石原)

第128号 (1987年11月)

真に慕うべきもの

老境の旧約詩人(詩篇第七三篇の作者)は、神を知らない悪人が榮えてますます幸福そうに生きるのを見て、ひと度は「足がつまずくばかり」に、「歩みがすべるばかり」にねたみ苦しんだが、ふたたび神に立ちかえった時、悪人の最後は滅びであり、自分はつねに神と共にあるのだとの悟りを得たのであった。その結果、「わたしはあなたのほかにだれを天にもち得よう。地にはあなたのほかに慕うべきものはない」(同七三・25)との信仰を告白するにいたるが、この詩人の言葉は私達にとっても深い慰めである。

人との見比べの生活でなく、あるいは単に目に見えるものにあこがれるのでなく、見えざる神を慕い、神と共に生きることこそ、地上の仮住居から天国をめざして歩む者のあるべき姿のように思われる。

日本人の平均寿命が伸びて、いわゆる高齢者の数は今や一、三〇〇万人を超えるといわれるが、その仲間入りの身となって、右の詩人の言葉が身近に感じられるにつけても、また福音を宣べ伝えることの重要性をも思わされるのである。

健やかに老いるとか、老後を楽しくといわれても、見比べの生活に陥って、ねたみ心に支配されては、結局、本当のしあわせは得られないであろう。

真に慕い仰ぐべきは唯一絶対者なる御神と、御子イエス・キリストの十字架のみであることを思うや切である。(桜井)

第129号 (1988年2月)

われらの国籍—二・一一に思う—

○敗戦と共に死んだ筈の「紀元節」が地上の権力により、異名同実の「建国記念の日」として再登場したのは一九六六年—敗戦の意識も反省も風化した戦後二十一年目の年であった。「国民の祝日に関する法律」はこの日を、「建国をしのび、国を愛する心を養う」日と定めているが、この日を強引に制定に至らしめた権力の強大さとその本質を知るキリスト者は、この日をして「われらの国籍」を更に強く確認すると共に、「信教の自由」を守る意識・高揚の日とするであろう。

○イエスは言われた。「わたしが世のものでないように、彼ら(キリスト者)も世のものではない。」(ヨハネ一七・16)と。またパウロはその信仰を端的に「わたしの国籍は天にある。」(ピリピ三・20)と表明し主の再臨、復活栄化を待望しつつ「キリストの十字架」に敵対する者と戦い、その馳場を走り抜いたのである。

○更にキリスト者は、イエスが前述の教えに引続き「あなた(神)がわたしを世につかわされたように、わたしも彼ら(キリスト者)を世につかわしました。」とされていることを深く学び、第一の国籍(本籍)を強く確認すると共に、第二の国籍の地、この日本を愛し「キリストの為、また神の国の為に」という日本の天職のために、各自の最善を尽くして労すべきであろう。

五十年前、「国家の理想」を述べ、「日本の理想を生かす為に、一先ずこの国を葬って下さい」と言われた矢内原忠雄先生の激しき戦いに小なりともならって。(大森)

第130号 (1988年5月)

律法の成就と終焉と

「キリストは凡て信ずる者の義とせられん為に律法の終となり給えり」ロマ十・四

ヨハネ伝一七章は、迫り来る十字架の時を前にして、極みまで愛された弟子たちに対し別れの言葉を与え励まされたあと、父と子=御自身のため、弟子たちのため、更には信ずる者すべてが愛において一致するために献げられた主イエスの、文字通り「偉大な祈り」であった。その中でも、著しく私共の注意をひく言葉の一つは、「彼らのため私自身を聖別します」(19)と祈られた御自身の重大な決意である。

この聖別という語は、奉獻をも意味している。イエス御自身の十字架上の奉獻を通して、信ずる者は義しい者とされるのだという確信を、パウロは、前述の「キリストは律法の終りとなられた」という一句に結晶させた。何という大胆な肯定！

柳生直行氏(一九八五年)は、冒頭の句を、「キリストは、彼を信ずるすべての人を神の前に義しい者とすることによって、律法の目的を完全に成就したもうたのである」と訳して、「律法の終り」は、同時に成就でもあることを明らかにされた。

一九三三年、塚本先生が、「パウロの道德無用論」と題してこの個所を、「...キリストが凡ての律法の目的また完成である。...キリストは律法の終局<sup>おわり</sup>であって、信ずる凡てのものを義とする...」と解された時、かなり衝撃的であったその解釈は、五〇年

の後、ここに新しい知己を見出したと言えよう。(石原)

第131号 (1988年7月)

「雅歌」を読む心

神という一字すら記されず、単に男女の愛(アーヘーブ)を讃えるに過ぎないかに見える旧約聖書の「雅歌」をめぐるは、古くから種々の解釈がなされているが、それだけに読む者の心を惑わせる。伝統的にはユダヤ教のラビ・アキバの唱える比喩説(神とイスラエル選民との関係を男女間の愛に喩えたとする説)により、「雅歌」は正典としての地位を確立されたが、今ではこの解釈も客観性に乏しいとして回避される様である。

最近「雅歌」を非宗教的な男女の愛の歌集と解する傾向にあるといわれ、一例では、男女の性愛を強調する訳注書さえ見られるが、文学としてなら兎も角、宗教書として「雅歌」を読もうとする者には躓きともなりかねないであろう。

「雅歌」を愛誦し、度々その講義をなされた矢内原忠雄先生は、この書を劇詩集として見た上、牧羊者説(若き牧羊者と愛人シユラムの女とソロモン王との愛の闘いと見る説)の立場から、「雅歌」に、靈的意味での、キリストと信者との美しい愛の關係の教訓を読みとられる。中でも、先生の次の言葉は、「雅歌」を正しく学ぼうとする者への一つの示唆であろう。

“雅歌は高い美しい心をもった人には、非常に美しく非常に高い輝きをもって読まれるし、卑しい心をもった人には非常に卑しく読まれるものである。雅歌を気高く読むか卑しく読むかということが、その人自身の心が気高いか卑しいかによって別れると思われるのであります。”(矢内原忠雄未発表聖書講義『伝道之書・雅歌』114ページ参照)(桜井)

第132号 (1988年10月)

愛という絆(きずな)

これらすべてに加えて、愛を身につけなさい。愛は、すべてを完成させるきずなです。コロサイ書三・14 新共同訳

半分しか出席できなかった吾国山の聖書の集いにむけて、再読したコロサイ書の中でも、旧い訳で「愛は徳を全うする帯なり」とある此の一節を、あらためて省察することができた。

帯にも連帯という、しばしば政治的にも用いられる意味があるが、絆という語には、

より家族的、地縁的な響きがある。もと家畜を繋ぐものとあるが、切れにくい強靱さが必要である。

パウロは12～13節で、七つの徳—憐憫、慈愛、謙遜、柔和、寛容、互忍、互恕—を、コロサイの人々が、聖なる、選ばれ、赦された者としての自覚に立って、熱心に追求するよう促した。

しかし、である。それら(の徳)は、決してバラバラに働くものであってはならない。それらを強く結びつけ、本なるキリストに繋ぎとめるものこそ、〈愛〉という見えない牽引力、霊的な絆であって、それによってすべて—彼の挙げた七つの徳のみならず、信仰者が目指すべきあらゆる徳—が完成されるのだと勧め励ますのである。「愛は君たちを結合し、そのことを通して完全へと導くのだ」と解しうる現代独語訳は、絆としての愛のはたらきを、より積極的に私共に提示してくれる。

ここで注目しなければならないこと、それは、完成・完全という語が、単なる個人の完全ではなく、結合されようとしている者たち全体—エクレシア(召された者の集合)という共同体—の完成・完全に向けて用いられているのだという点にある。(石原)

第133号 (1988年12月)

## 信仰による飛躍

水戸無教会集会の発足が、昭和29年6月、矢内原忠雄先生の水戸伝道を直接の機縁とするものであることは、これまでも度々語られた。偶々、その折の嘉信読者会に出席を許され、矢内原先生がロマ書十二章の実践訓を朗読される姿に接した私は、その後、ロマ書に魅せられて、集会でも非才を省みず講解を担当したいきさつがある。

そのロマ書の中で、印象に残る理念の一つは、矢内原先生が説かれる“信仰による飛躍”ということであり、これまでの歩みの中で、何か迷いがある毎に、この理念が私の支えであった。

“その時十字架の生きたる力は彼を『救』に飛躍せしめるのである”とか、“飛躍は人の信仰生活の為に絶対不可欠であり”等の言葉がそれである(「ロマ書五講」矢内原全集八巻)

この飛躍はキリストへの祈りによってのみ与えられる。

塚本虎二先生も次の様に述べておられる。

“神の御心によることなら、どこか理屈の通らない、頭で割り切れない、ただ信仰だけで飛躍できる所があるものだ”(『友よ、これにて勝て』P53)

この事は、私が今年の夏期聖書集会でコロサイ書を担当し、感話会の際、ある姉妹の思いがけない感話に接した時、それまで決断のつかなかった私的な迷い事に、活然と目覚めて思い切った飛躍をすることが出来たという、私の小さな体験からも、感謝をもって書きとめておきたい一つの信仰理念である。(桜井)

第134号 (1989年3月)

低き門・低き途(マタイ18章小感)

天の国に入らせていただくために、狭き門より入れと山上の説教でイエスは教えられた。別の時に、「天の国で一番偉いのは誰ですか」と問う弟子たちに「心を入替えて子供のようにになるのでなければ天の国に入れていただけない。自分を低くしてこの子供のようになるものが、天の国でいちばんだ」と告げて彼らの順位争い(マルコ9章)に頂門の一針を与えられた。

低くするとはどういうことか。それは、見せるための卑下ではない。あのリクルート事件の中心人物のように、特別な魂胆があって、わざと下座を選ぶことでもない。それは眼前にいる小さな子供のようにになってしまうまで、謙って自らを低くすること。すべての高ぶりからふり落され、自らに恃むべき何もものもないことを心底まで示され、パウロのいう罪人の首を実感させられること。そのときはじめて天の国の門は開かれる。

水戸市内の小学校に、大変古く頑丈な低い通用口をもつ校門がある。いつも空いているのは左右の、大人の高さに満たない通用口だけである。たまに訪れるであろう卒業生たちは、文字通り、体を低くしてこの通用口を通らねばならない。

低き門は、昂然として大荷物を担いで来る人間には入れない。パウロは主イエスのご生涯が、己を低くして十字架の死まで従われたことを知って、己もまた、戦いと労苦を越え、主の歩まれた低き途を辿るべきことを鮮烈に自覚していたのであった。「謙遜とは我々が神の前に実際に如何に低いものであるかということを知ること以外の何ものでもない」(シュニーヴィント)(石原)

第135号 (1989年5月)

“何が神の御心であるか”

パウロはローマ人への手紙で信者の実践訓をのべるに先立ち、その基本として、“この世に調子を合せず、何が神の御心であるか、つまり何が神にとって善であり、喜びであり、また完全であるかをわきまえ得る様に、造りかえて頂け”と訓えている(十二章2節、塚本訳、柳生訳等参照)。ここで、“造りかえて頂く”とは、生れ乍らに神に背く人間が、キリストへの信仰により、神の方へと向きをかえて頂くことであるから、神の御心をわきまえ知る力も、いわば神から頂くものである。

また、信者のこの世に処するあり方は、各自の立場により、千差万別であり、パウロといえども、すべての人の行動基準を具体的に指示することは至難である。そこで

まず、彼は信者の行動の基本として、何よりも神の御心にそうべく、何が神に善であり、喜びであり、また完全であるかをわきまえて行動せよと訓えているわけである。

然も人は信仰を与えられた後も、サタンが共に住むこの世に肉の体で生きている間は、苦難や試練に出会うと、兎角、閉口たれて、何が神の御心であるか分からなくなることさえある。神の御心は時には人に隠され、時には人知を超えて示されるからである。あるいは来世で始めて示されるものかも知れない。

従って“何が神の御心であるか”測りかねることがあっても疑わず、信者は常に、それこそ神の御心の証しである聖書に還って、絶えず祈り求め、忍耐を以て待つべきであろう。(桜井)

### 第136号 (1989年7月)

#### 恩恵の三十五年－われら何をなすべきか

一九五四(昭和二十九)年六月六日－故半田梅雄兄の言葉によれば「一方には水戸学に基礎を置く伝統的国粹主義、他方には零細な商業都市として根深い実利主義、それらに加えて敗戦後の退廃的風潮と水戸人の性格故に激烈なソシアリズム的傾向等、頗る複雑な思想的背景を持つ水戸市、而してカトリックとプロテスタント諸教派の教会も決して少ない数ではない水戸市。」に聖霊は降臨し給うた。

すなわち当日の午後、カトリック教会と相對していた建物の一室で開催された矢内原忠雄先生の「基督教座談会」を契機に、聖霊はこの地に「水戸無教会」を誕生せしめ、翌週の聖日六月十三日より集会を発足せしめ給うたのである。

爾来三十五年－いま恩恵の日々、感謝の数々を想起すると共に、御指導を頂いた多くの信仰の師、先輩の方々を既に天に送ったこの集会にも「無教会はこれでよいのか」、「これからの無教会はどうあるべきか」の諸問題が強く押し寄せているのを痛感せざるを得ない。いま許されて三十六年目の歩みを始めるに当り、これら幾多の難問、障害点を克服し一層、恩恵の伝達・真理の継承を進めるため次の矢内原先生の教えを想起したい。「今は大切な時であります。光は机の下に隠れるべきものではありません。台の上に立って世の暗きを照すべきものであるのです。因循姑息は許されません。我らの戦うべき敵は多いのであります。」そしてこの教えの実践のために本誌標題の祈り「ただキリストと共に歩む」ことを一層強く祈求したい。(大森)

### 第137号 (1989年12月)

#### 「宇宙の観物」と「渴く大地」と

神は、われわれ使徒をいちばんあとまわしになさったのではないかと、わたしは思う。ちょうど、競技場で殺される運命にある捕虜たちが、凱旋行列のいちばんあとについて行くように。じじつ、われわれは宇宙の、つまり人間ばかりでなく天使た

ちにも見られる、見世物にされている…。(第一コリント四・九柳生 訳)

パウロはコリントの人々に、使徒職の光栄と悲惨とを語る。彼が抱いたのと同じ感懐を、二千年の間、キリストの僕として歩んだ人々が抱きながら、召されていった。私共の小さな群のために労された先輩たちも、正にそのような生涯を生き、今は召されてみもとにおられる。一〇九号に掲げた『証人』という語に、そのような光栄と悲惨の担い手の姿をみるのである。

三〇年前、『見せものにされた生涯』(22号)で「キリストを信ずる者の途が、如何に険しく狭くあるかを、身をもって経験して来た彼によって、此の宇宙的アリーナに於ける闘技者としての使徒の生と死とが示されたということは、何と劇的なことであるか」と述べた私の思いは、今も変わらない。

今、私共の間では、かつての生死をかけての信仰者の戦いという状況は、あまり見えてこない。しかし、此の豊かさの極みにある此の国の中で、如何にいのちが脅かされ、人間の尊厳が無視されているか、更にはアジア諸国、アフリカ新独立国群の中で継起している惨が如何に絶望的な状況にあるかという事態から目を外らすことは許されない。犬養道子『渴く大地』はこの点で大きな示唆を与えてくれたことを著者に感謝する。(石原)

第138号 (1990年3月)

朝の歓喜

夕暮れに<sup>かなしみ</sup>悲嘆が宿るときにも

朝には<sup>あした</sup><sup>よろこび</sup>歓喜があるでしょう。〈詩篇第三〇・5b、片山訳(注)〉

この旧約の詩人は神本位に真摯に生きる者として、死に瀕するほどの病を癒された時の喜びを美しく表現している。勿論この詩人に復活の希望という信仰はなかったろうが…。

人生の長い旅路において、私達も種々の苦難や悩みに遭遇する。病気もその一つであろう。或いは寝苦しい夜など、ふと自分の来し方行く末を考えて、思い悩むようなこともあろう。そんな時、自分の力だけに頼ろうとする者は遂に絶望に陥ることさえ無いとは言えない。しかし神に寄り頼む者には、その苦難や悩みは、この詩人の場合のように神様がいつかは取り除いてくださるとの喜びがあり希望がある。

まして、新約の時代にあつてイエス・キリストによる復活の信仰を与えられている者には、この喜びと希望はこの世だけに限らず、来たるべき世にも約束されている。

使徒パウロが捕われの身でありながら、ピリピ人達に書き送った手紙のなかで、繰り返し繰り返し“常に喜べ”と諭しているのも、復活の望みのゆえである。(同書三・10～11)

私達にもいつかは悲しみの宿ることがあるであろうが、その時も絶望する事なく、復活の朝にはきっと喜びが伴うことを信じ、耐え忍びつつ歩み続けたく思う。(桜



井)

(注)「キリスト教常識」95号昭和29年5月[片山徹著『復活のいのち』所収]

第139号 (1990年5月)

キリスト者の「旗」－第四十三回憲法記念日に思う－

○水戸地方伝道二十余回、私どもに??る清冽な純福音を豊かに注いで下さった藤沢武義先生は、その信仰証誌「求道」の巻頭言を「旗」と題され、常に「旗色鮮明」にその「旗」を立て、その「旗」の下に命がけの伝道が続けられた。

○旗は高く掲げられ、目標・しるしとなる。藤沢先生は「ただ天を見つめ真理に忠実」を目標とされ、そのしるしとしての「旗」を高く掲揚し続けられた。然し今春より文部省は何を狙い何を目標として、「処分」をちらつかせつつ学校現場に「日の丸」の掲揚を強制しているのか。(またなぜ「君が代」を国歌と称しその斉唱を強制しているのか。)文部省が小中高校に対し教育内容や要点等を示す文書「学習指導要領」は一九四七年、「試案」－「教師自身が自分で研究していく手びき」として出発したが、反動化と共に「試案」が削除され「官報告示」となって教師の創造的活動を抑え、管理と法的拘束を強化しつつ今春に至った。この流れからみても今回の「日の丸」掲揚(そして「君が代」斉唱)の強制は、大嘗祭等と連動しつつ「内なる天皇制」の強化と改憲を図るための教育統制にその目標があると思われる。

○キリスト者は天地の創造主である唯一の神を信じ、イエス・キリストを主と告白し、この世の者を神とする如何なる試みにも反対する。従って真のキリスト者は藤沢先生の如く「旗色鮮明」に「ヤハウエはわが旗」を高く掲げ、併せて「キリストの十字架の旗」の下に帰属しつつ、全エクレンヤの勝利のためにサタンとの戦いを、闘い続けるであろう。(大森)

第140号 (1990年7月)

内村鑑三と鈴木弼美

私共の敬愛する鈴木弼美先生は90年の生涯を了え凱旋された。旧友前野正氏が掲題で、鈴木先生の半生が不思議な聖手に導かれたことを'55年に書いておられる。Mヴォーリスとの邂逅を通して鑑三の元に導かれ、やがて師の二つのJを真剣に受継ぎ、あの第三水曜会の方々の協力を得て小国の地に独立学校が生れたこと、戦時下村人の白眼視と当局の長期拘留に耐抜いて、夫人と共に新制高等学校を設立、七年間の苦心のあと漸く世人から注目されるに至ったことを、雄渾な筆で紹介された(50年誌)。

以来35年、鑑三が日本のチベットとして囑目した僻地に生れた日本最小の高校が、

聖書と学問と労働—鑑三の読むべきもの、学ぶべきもの、為すべきもの—との見事な調和の上に展開された、ペスタロッチのそれにも比すべきゆるぎなき教育共同体に、特別な注目と敬意を払う人々が次第に増大した。今の日本の教育の潮流と正反対な行き方が、この国の病み、混迷を極める教育社会に対して訴えるものが如何に大きいかを示すものと言わねばなるまい。

鈴木先生が日本友和会会長として憲法の精神を正しく活かすべく、「平和の福音」の使者として残された偉大な足跡についてふれる余白はないが、12回の八王子内村記念講演回毎に(内二回は壇を共にすることを許された)あの若々しく柔和な眼ざしで、最も平易なことばで、師と福音と非戦を語られたことを忘れない。「経済成長は神の罰である」は「戦争放棄の光栄」と共に、平和者鈴木弼美の生涯をかけた祖国への遺言であった。(石原)

第141号 (1990年11月)

“合理的な礼拝”—無教会主義のあり方

“それゆえ 兄弟たちよ 神さまのおあわれみによって 私は あなたたちにすすめます あなたたちのからだを み心にかなう 清い 生きた いけにえとして 神さまにささげなさい これが あなたたちの合理的な礼拝です”

(篠遠喜人私訳「新約聖書」ローマ人へのてがみ 一二章1節)

自然科学者で無教会信者の篠遠喜人先生が四〇年の歳月をかけた私訳聖書で、「合理的な礼拝」と、思いきった訳し方をされた末尾の原語<ロギケー ラツレーヤー>を従来大方は「霊的な礼拝」と訳しているが、この形容詞<ロギコス>は、‘理に適った’と‘霊的な’の両意あり、パウロがローマ書のここだけに用いた背景からは、‘理に適った’(合理的な)をとる少数意見も強く、<ロギゴス>は訳し難い語とも言われる。

塚本訳で「霊的な礼拝」に敷衍して“あなた達の礼拝は動物を供えるような不合理なものでなく、全心全霊をささげる合理的な礼拝でなければならない”とされた所以であろう。

ところで、儀式、制度にとらわれず、ただキリストの福音により生きることをもって信条とする無教会は、当節、掴み所がないとか、いずれは消滅するだろうなどともいわれるが、今後とも、揺るぎない歩みが続けることが出来るかどうかは、パウロが、“あなたたちの体を生きたいけにえとして神にささげなさい”と勧める「合理的な礼拝」の教訓を、単なる精神的なものとして受け止めず、無教会信者の一人ひとりが真剣に実践できるかどうか、つまり、ローマ書(を含む聖書)を本当に生きることが出来るかどうかにかかっているともしよう。(桜井)

第142号 (1991年3月)

悲しむことと喜ぶこと

(私たちは)悲しんでいるようであるが、常に喜んでおり、貧しいようであるが、多くの人を富ませ、何も持たないようであるが、すべてのものを持っている。(IIコリント六10)

先頃、宮田光雄氏の「解放としての笑い」(「世界」二月号)というすぐれたエッセイを読んだ。主題は、聖書とキリスト教世界における笑い、ことにユーモアであるが、その鋭い洞察には教えられるところが多かった。氏が取上げたのは、「人を救う笑い」としてのユーモアであり、イエスの場合、パウロの場合、ルターやバルトの場合を論じたあと、「あなた方いま泣いている人はさいわいだ、笑うようになるからである」(ルカ六21)というイエスの御言が結びとして掲げられている。

これを読みながら思い起したのが、八木重吉の詩である。

この世にてんごくのきたる  
その日までわがかなしみのうたはきえず  
てんごくのまぼろしをかんずる  
その日あるかぎりわがよろこびの<sup>うた</sup>頌歌はきえず

ここには、キリストを信じて生きる者の避け得ないかなしみの体験と、十字架による赦しに与って新しい天と地とを望見することを許された者に臨む湧き出るよろこびの調べとがある。このような信仰者としてのかなしみとよろこびを知るということは、キリストの苦難の充満とキリストによる慰めの充満を告白したパウロ(IIコリント一5)と共に、キリストを信ずる者から取去ることのできない光栄というべきではないか。(石原)

第143号 (1991年6月)

斎藤茂先生と水戸無教会  
— 先生のご昇天に想う —

さる三月一五日に九一歳のご高齢で天父のみもとに召された斎藤茂先生は、特に、塚本虎二先生の片腕として、いわば、縁の下の力持ち的な役割を果たされたのであった。その先生の活躍舞台の一つ常磐地区のうち、この水戸では、昭和二九年頃、斎藤先生の講演会が一度もたれただけで、再びお願いするという機会はずいぶん与えられなかった。

しかし、今を去る丁度三七年前、矢内原忠雄先生の水戸講演を直接の機縁に、松本文助老兄、故半田梅雄兄らが中心となって結成された水戸無教会集会の、発足機運が

醸し出されるまでの背景には、塚本・斎藤両先生と松本老兄との、長い間の信仰的な交わりがあったことを忘れることは出来ない。例えば、『キリスト教常識』誌百号記念の後書きには、松本老兄の手紙が匿名ながら、次のように紹介されている。

“常識誌第百号に達せられ、お目でとうございます。創刊号(注)は私の南方から引き上げ新生の思いを以て日本の土を踏んだ月でもあり、当幼稚園の戦災後再出発の月でもあって懐かしい思い出でありました。...(以下略)”(注)昭和二一年五月一五日創刊

塚本・斎藤両先生と松本老兄との信仰的絆が水戸の地での福音の前進にいかにか大きな役割を果たされたかをいまさらの如く思い返される。

斎藤茂先生の御霊のご平安をお祈り申し上げます。(桜井)

#### 第144号 (1991年10月)

「再臨」について、思うこと

今夏、私たちは宿泊の特別集会をもち「テサロニケ人への第一の手紙」を集中して学んだ。

この手紙はパウロの手紙の中で最も古く、また新約聖書中最も初めに書かれたものであるから、内村先生が教示される通り私たちは「新約聖書中の泉」であるこの手紙によって、「新鮮生気の掬すべき」「キリスト教会最始の信仰」を、特にその信仰の根幹であり、新約聖書全体を通じての基調である「再臨」の希望について学ぶことができる。

ところで無教会の再臨に対する見解の一つを、私たちは浅見仙作翁・治安維持法違反事件における大審院への上告趣意書(昭和十九年提出)の中の次の抄文に見ることができよう。『無教会者ハ所謂キリストノ再臨ニ付テモ理智的ニシテ従テ精神上ノ問題ヲ超越シ現実ノ国家社会ト混同シ、キリストガ肉体ヲ以テ此ノ地上ニ来ルトカ世界各国ノ統治権ヲ撰取スルト云フガ如キコトヲ説カザルモノ...全ク靈魂上ノ問題ナリ。』

この見解が「テサロニケ人への手紙」を始めとする新約聖書の再臨の教えとどのように関連するのか、また「キリストの再臨とはキリスト御自身の再臨である。これは聖霊の臨在と称する事とは全然別の事である。」とする内村先生の信仰と結び得るものなのか。私たちは「再臨再唱の必要」を説きつつ召されていった内村先生に倣い、更に「再臨」の信仰を学び深かめていかなければならないと思う。(大森)

#### 第145号 (1991年12月)

いのちより大切なものが

いのちが一番大切だと 思っていたころ  
生きるのが苦しかった

いのちより大切なものが あると知った日  
生きているのが 嬉しかった

この星野富弘さんの詩(「日々草」)には、今の時代に対する強烈なプロテストが秘められていると思う。

人々は、かつての星野さん同様、いのちが一番大切だと考える。しかし同時に、今はお金の時代である。こどもから老人に至るまで、お金があれば欲しいものは何でも—医学の進歩した現在、いのちもとさえ考える。事実、乳児死亡率もまた、お金=経済力に大きく左右されてきたではないか。

このいのちを、地球上の生を含めて危うくするものに対するプロテストが環境問題であるが、世界は今、開発や経済成長を犠牲にしても、環境を保全すべきだと考え始めた。ここにも、いのちが一番大切だという認識がある。いのちとお金と環境とが、今ほど複雑にからみ合っている時代はなかった。

このような時代を、いのちを育てる健康教育の場で生きていた星野さんに突然訪れた不慮の事故と挫折。正に生きるのが苦しかった日々であった。その苦しみの底で、キリストに出会った時、いのちより大切なものが何であるかを知って、生きることが喜びと感謝になった。このような価値の転倒が、今、個人にも、社会にも、求められているのではないか。(石原)

第146号 (1992年2月)

“信仰の小さい人たちよ！”

きょうは花咲き、あすは炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこんなに装ってくださるからには、ましてあなた達はなおさらのことではないか。信仰の小さい人たちよ！  
(塚本訳マタイ六・30)

イエスはこの山上訓で弟子達に、神を信じ、生活の心配をするなと諭し、“オリゴピストイ”(信仰の小さい—或いは、信仰の薄い—人たちよ)と言って嘆かれた。(注)

弟子達だけに対して用いたこの呼びかけには、弟子への期待と同時に、全能の神の独り子から見れば、一切を投げ捨てて従った弟子達といえども、全能ではあり得ないことへの、イエスの思いやりが示されている。また信仰と力の源泉はイエスにあり、信仰の評価者としてのイエスのみ言葉とも受け取れよう。

一方、生前の師の言葉とみ業の全部をは理解できず、殊に、救世主の十字架上の死という出来事に躓く弟子達であったが、復活のイエスに出会って初めて“行ってすべての国の人をわたしの弟子にせよ”(マタイ二八・19)とのみ言葉に目覚め、福音の証人となった信仰は大である。マタイが“オリゴピストイ”との言葉を書き留めたことの意義も大きい。

直接の弟子ならぬ、迫害者でさえあったパウロの、使徒への転換という出来事の源泉も、まさにイエスの愛にあった。

この意味でキリスト者は信仰を自己評価せず、無力を嘆かず、“小信もの”そのままにイエスに従うことであろう。(桜井)

(注) (マタイ八・26、一四・31、七・20、ルカ一二・28も同様の表現、マター一六・8前田訳—小信もの—、NEB, REB, NRSVなど“little faith”)

第147号 (1992年5月)

内村先生と讃美歌—讃美溢れる集会への勧め

一九三〇(昭和五)年三月三十日、内村鑑三先生の葬儀が柏木聖書講堂で行われた際、「然らば今日のこの式は内村鑑三の告別式であるよりも、むしろ新日本の定礎式であります。」という藤井武の激しい告別の辞の後に、讃美歌四四六(現行二六〇)番が歌われました。『千歳の岩よ、わが身を困め』で始まるこの讃美歌は「余の学びし最初の讃美歌にして、また最も好く、救いに関する余の信仰を表わす」という先生にとって、文字通り特愛の讃美歌でありました。またこの讃美歌には先生にとって悲壮な思い出がありました。あの「不敬事件」のあった一八九一(明治二十四)年春、「(先生が)逆臣、国賊として国人にくるしめらるるの声を聞きながら悲しき眠りにつきし」加寿子夫人の枕辺で、先生と父君が共に歌ったのもこの讃美歌だったのです。先生は「讃美歌はキリスト信徒の靈魂の声。」「キリスト信徒の喜怒哀楽は、すべてその讃美歌に現わる。」とし「楽感に乏しく」とも「霊と誠」とをもって歌うべきことを勧めておられます。

また最近、枯渇、セクト化した集会における讃美の貧困を憂え「新しい讃美歌を作ろう。」という呼びかけが高橋三郎先生や島忠勇先生そして島崎暉久先生によってなされていますが、私たちは内村先生の勧めとこれら諸先生の提案に応え、「新しい讃美の歌」が豊かに湧出する集会—「御霊に満されて、詩と讃美と霊の歌をもって語り合い、主に向かって心から讃美の歌をうたう(エペソ五・15~19)」集会を切に祈りたいと思います。(大森)

第148号 (1992年7月)

足る、足らず

スエーデンで国連人間環境会議が開かれた時、世界は漸くローマクラブの〈成長の限界〉に重大な関心を向け、日本代表もまた、“より大きなGNPが人間幸福の指標と考え、これに最大の情熱を傾ける”ことの誤りを表明した。しかし、以後二十年間、各国は何をしてきたか？ベトナム後も、打続く戦乱が地球を破壊しただけでなく、経済活動や生活水準の上昇が、地球の負担の著しい増大を招いたことに、どれ程抵抗し

たか。

グリーンGNPという提案がブラジルの会議に登場した。日本に即して言えば、美しい国土に、膨大な物的、生物的社会的負担と打撃を与えることで実現できた高成長は、そのような負荷と打撃を、費用として負担しなければならないのである。

ここで我々は、「汝の高浪ここに止るべし」というヨブの受けた言葉を、畏れをもって想起する。地の資源を濫費し、環境破壊に歯止めを見出し得ないでいる人間の愚かさの中、しかも、回復に残された時間はあと二十年しかないともいう中で！

〈豊かさ〉を限りなく追求めてきた人々が、では如何にして限界を知り、立止ることができるか。その点で二宮尊徳やガンジーは、我々にすぐれた実践を通して教えてくれた。しかし更に徹底して「どんな境遇にあっても足ることを学んだ」(ピリピ四11-13)と確信を語るのは、人生の達人パウロであるが、それは、より窮極的には「我が恩恵汝に足れり」(IIコリント一二9以下)という、新しい世界に生きることを許された者の自由であった。92・6・12(石原)

第149号 (1992年12月)

“キリストを着る”

パウロはガラテヤの信徒たちに、「キリストに合うバプテスマをあなたがたは、皆キリストを着たのである。」と書き送っている(三・27)。これはキリストを信じた結果、その十字架の死と復活の命にあずかるという真の意味での「洗礼を受けた」(前田訳では<清められた>)者は、皆キリストと一体となり、神の国の相続人とされたとの恩恵の福音を「キリストを着た」と、比喩的に表現したものと解される。

ところが、パウロはローマの信徒たちに対しては、「主イエス・キリストを着なさい。肉の欲を満たすことに心を向けてはならない。」(一三・14)と、すでに信者である彼らに、なおも「キリストを着る」ことを勧めているかに見えて、一読、矛盾した感じさえ抱かされる。

しかし信者も生身の人間で、いつまた悪魔の誘惑に陥って信仰が駄目になり、神の国の相続失格者となるかも知れない。だから、神の子とされたことに慢心せず、悪魔に対抗するため「光の武具を着けよう」(一三・12)との意味で実践的に、ここでは「キリストを着よ」と戒めているものと解される。

「キリストを着た」との恩恵の福音が、さらに「キリストを着よ」との実践訓に転化されているところに、パウロの教えの単なる教義に終わらず、人々を引きつける力強さがある。

聖アウグスティヌスは彼が32歳のとき、ここに引用したローマ書の戒め(一三・13～14)に接して、回心したといわれるが、その所以も理解されるように思う。(桜井)

第150号（1993年3月）

我らの里程標—第一五〇号に寄せて—

半田梅雄兄が、《ただキリストと共に歩む》この「水戸無教会」誌を、信友たちの協力の下に発刊に踏切られたのは、55年であるが、二五年後の第百号巻頭に、〈両手で支える重み〉と松本文助老兄は記された。正しく百冊に凝集された告白の重みを直感された一言である。末尾の半田兄の文章は、謙遜<sup>つつまし</sup>さに充ちて、二五年の歩みの上に与えられた恩寵への溢れる感謝を伝える。そこに記された一五人の先生の大半は天に召された。

それから一二年の今、百五十号の重味を実感しようとしている。果して私たちは、一日一日を福音に生き、生かされている者として、どれだけ誠実な告白をなし得たか。大きな恐れをもって、このことを思い返している。“福音に生きる者の喜びと希望を確かめ合い、その歓喜と感謝を師友にお知らせすると共に、聖書に真理と平安を求める人々に、少しでもお役に立ちたい”と記した半田兄の百号に寄せる祈りが、どれだけ生かされているかが、今日も、私たち一人一人に問われている。

宇野輝兄は、年毎に一里塚を辿り来たことの恩恵を感謝を以て語られた。どうか、私たちの信仰者としての歩みの里程標ともいべきこの小誌が、世紀を越えて激しく揺れ動く時代の荒海の唯中であって、御許しのある限り、ささやかな航行を続けることができるようにと願いかつ祈る。ここまで導きを与え給うた主と、絶えず励ましを与えて下さった師友への感謝と共に。

「かくて主は彼らをその望むところの港に導きたまう」

(詩篇一〇七・30) (石原)